様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月　 ８ 日現在

機関番号：１４６０２
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４７２０２２３

研究課題名（和文）統語論と語用論のインターフェイスに関する日英語対照研究

研究課題名（英文）A contrastive study of English and Japanese from a syntax/pragmatics interface perspective

研究代表者
今野　弘章（Konno, Hiroaki）

奈良女子大学・人文科学系・准教授

研究者番号：８０４３３６３９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、日本語と英語の多様な構文を話し手の伝達意図という語用論的特徴に注目しながら観察し、統語論と語用論のインターフェイスについて考察した。特に、話者の伝達意図という語用論的性質と機能範疇という統語的性質の間にどのような対応関係が見られるのかを明らかにした。日英語には、話者の伝達意図を欠く非伝達的表現が機能範疇を同時に欠く場合、話者の伝達意図を含む伝達的表現が機能範疇を同時に含む場合が存在する。これらの事例は、伝達意図の有無と機能範疇の有無が類像的（iconic）に対応する場合があることを示している。

研究成果の概要（英文）：With special reference to the pragmatic notion of the speaker’s communicative intention, I investigated various types of linguistic expressions in English and Japanese to reveal how pragmatics and syntax are related. In particular, I showed how the speaker’s communicative intention is related to the syntactic make-up of linguistic expressions. English and Japanese have grammatical constructions that are defective in both communicative intention and functional categories, and those that are not. An iconic relation obtains in these two languages between the presence/absence of the speaker’s communicative intention and the presence/absence of functional categories.

研究分野：英語学

キーワード：類像性　機能範疇　伝達意図

１．研究開始当初の背景

研究代表者は、2008～2009 年度にかけて科研費（若手研究(B)，研究課題番号：20720132）の助成を受け、日本語と英語の周辺的現象における形と意味のインターフェイスに関する研究を行った。統語論と語用論のインターフェイスに関する本研究課題は、その成果を以下に述べる背景との関連で更に発展させるものである。

言語研究の様々な場面において言語の「伝達性」が注目されてきた。個別現象の記述研究においては、話者による聞き手への情報伝達を目的とする言語表現（「伝達的表現」）の存在と、話者による思考や感情・感覚の表出を目的とし、聞き手への情報伝達は目的としない言語表現（「非伝達的表現」）の存在が指摘されている。

また、「言語の本質的機能は何か」という理論的問題との関連でも、言語が持つ伝達機能と表出機能という 2 つの側面が注目されている。大きく分けて、言語の本質は情報の伝達にあるとする機能主義的立場、言語の本質は思考の表出にあり、情報の伝達は本質的ではないとする形式主義的立場、言語の本質は、伝達と表出の両者にあるものの、比重は伝達に置かれているという中間的立場がある。

このように、伝達的／非伝達的（あるいは伝達／表出）という言語の異なる 2 側面は、記述研究においても理論研究においても注目されている。しかしながら、実際の研究の多くは、言語の伝達的側面に焦点を当てたものか、あるいは、そもそも伝達的／非伝達的の区別を意識していないものである。とりわけ、言語の非伝達的側面に注目した研究は少なく、伝達的な言語現象に比べ、非伝達的な言語現象の種類や性質は十分には明らかにされていない。

また、1990 年代終盤から、文の統語構造における機能範疇 CP を精緻化する方法による統語論と語用論のインターフェイス研究が盛んに行われている。だが、この研究の潮流においても、伝達的／非伝達的という語用論的側面はあまり考慮されず、従って、当該の語用論的特徴と統語構造の関連は明らかにされていない。

２．研究の目的

本研究は、日英語の多様な構文を伝達的／非伝達的という語用論的特徴に注目しながら観察し、統語論と語用論のインターフェイスの一端を明らかにすることを目的とする。特に、日本語と英語の言語表現において、伝達的／非伝達的という語用論的特徴と機能範疇という統語的特徴の間にどのような相関が見られるのかを調査する。より具体的な目的は、以下の 3 点である。

(1) 機能範疇を欠くという統語的特性と話者の伝達意図（ある言語表現を用いる際に話者が聞き手の存在を想定すること、以下「伝達意図」）を欠くという語用論的特性が類像的（iconic）に対応する場合があることを実証的に示す。

(2) 機能範疇を持つという統語的特性と伝達意図を持つという語用論的特性が類像的に対応する場合があることを実証的に示す。

(3) (1)および(2)に関する研究成果が言語の本質的機能の問題に対して持つ意味合いを考察する。

３．研究の方法

本研究で検証する機能範疇の有無と伝達意図の有無の類像的対応関係は、言語現象を丁寧に記述することによってその妥当性を検証する必要がある。

(1) 研究代表者によるものも含めた先行研究の知見を用い、機能範疇の欠如と伝達意図の欠如の対応を示す構文が存在するかどうかを検証する。日本語のイ落ち構文（例：「うまっ！」)、英語の mad magazine 構文（例：Him wear a tuxedo?!)、英語の日記文における主語省略（例：Wish was dead.）を研究対象とする。

(2) 新たな記述研究により、機能範疇の存在と伝達意図の存在の対応を示す構文が存在するかどうかを検証する。日本語の形容詞「やばい」の程度副詞用法（例：「やばいうまい」)、日本語の複合的助詞表現「からの」の単独用法（例：話者 A「礼を言うよ。」話者 B「からの？悪口でしょう？」）を研究対象とする。

(3) 上記(1)と(2)の研究成果が言語の本質的機能の問題に対してどのような意義を持つのかを、言語学や発達心理学の知見を参照しながら考察する。

(4) 研究成果については、学会や研究会で口頭発表をした上で論文にまとめて公表する。

４．研究成果

(1) 機能範疇の欠如と伝達意図の欠如について

①日本語のイ落ち構文が機能範疇および伝達意図を欠くことを、研究代表者による先行研究（今野 2012）の知見を用いて確認した。前者の特徴は、イ落ち構文が終止形活用語尾を欠き主語の主格標示ができないことによって示される。後者の特徴は、イ落ち構文が「伝える」の直接話法補部として生起できないことから示される。

②英語の mad magazine 構文が機能範疇および伝達意図を欠くことを、先行研究の知見を用いて確認した。前者の特徴は、mad magazine 構文の動詞が原形で現れ、主語の主格標示ができないこと（Akmajian 1984）によって示される。後者の特徴は、mad magazine 構文が tell の直接話法補部として生起できないこと（今野 2012）で示される。

③英語の日記文における主語省略が伝達意図を欠くことを先行研究（廣瀬（2006))

の知見によって確認した。日記文の主語省略は、主語を導入する統語的素性を欠いていると考えると、機能範疇そのものではないものの、その一部を欠くという点で、機能範疇と伝達意図の欠如の対応を示す現象と捉えられる。

(2) 機能範疇の存在と伝達意図の存在について

①否定的形容詞「やばい」の程度副詞用法（副詞的「やばい」）の文法的特性を記述し、副詞的「やばい」が伝達的表現としての用法をより基本とすることを明らかにした。

副詞的「やばい」は、以下の2段階のプロセスを経て生じたと考えられる。まず、否定的形容詞「やばい」が程度形容詞化（Sano 2005）し、統語的主要部が意味的修飾部に対応するという形と意味のミスマッチが生じる。次に、この程度形容詞としての「やばい」が副詞的成分化し、統語的修飾部と意味的修飾部が一致し、形と意味のミスマッチが解消される。

副詞的「やばい」におけるミスマッチ解消は、程度形容詞「やばい」で言語化されない（何の程度を述べたものかを決定する）部分を他の用言によって言語化する。したがって、程度形容詞「やばい」→副詞的「やばい」の用法拡張は、「できるだけ言え」という聞き手志向の語用論的原則（Horn 1984）を満たす。副詞的「やばい」が示す伝達的表現志向性は、当該の現象が聞き手志向の語用論的原則を満たすことの反映であり、上述の用法拡張のプロセス自体に動機付けられたものと考えられる。

副詞的「やばい」は修飾する用言の程度を強調する働きを持つため、機能範疇 Deg（Abney 1987）の指定部で認可されると考えられる。したがって、副詞的「やばい」は、認可に機能範疇を要求するという点で、機能範疇が存在する現象といえる。これらのことから、副詞的「やばい」は、機能範疇が存在することと伝達意図が存在することの対応を示す現象と特徴付けられる。

②格助詞「から」と連体助詞「の」の複合形式である「からの」が単独で生起する新用法（「からの」）の文法的特性を記述し、当該表現が以下の形式的、情報構造的、機能的特性を兼ね備えていることを明らかにした。Whitman 1998 に従い連体助詞「の」が DP 主要部であると仮定すると、「からの」は「の」を主要部とする DP の指定部に「から」を主要部とする PP が存在するという内部構造を持つ。

また、「からの」は「から」と「の」の補部にそれぞれゼロ代名詞を含む。この2つのゼロ代名詞は、それぞれ、「からの」の前後の状況を指示し、情報構造のレベルにおける主題と焦点に対応する。

そして、「からの」は、話し手が、先行状況を当該談話の主題として受け、それに引き続き、後続談話に対応する異なる状況を焦点として聞き手に提示するあるいは聞き手に提示するよう要請するための伝達的表現として用いられる。このように、「からの」は機能範疇 D を含み、伝達的表現に特化しており、機能範疇の存在と伝達意図の存在の対応を支持する現象と特徴付けられる。

(3) 言語の本質的機能について

(1)と(2)の成果を活用し、機能範疇の有無とは独立に、言語の本質的機能の問題に関して本研究が持ちうる意義を論じた。

本研究から明らかなのは、伝達的表現と非伝達的表現とで単に曖昧なのではなく、どちらかをより基本とする現象や伝達的表現あるいは非伝達的表現に特化した現象が日英語に存在するということである。

言語の本質的機能に関しては、伝達的表現優位とする見方が優勢である。また、言語発達に関しても伝達的表現優位という見方がある（浜田 1999）。だが、本研究の成果は、伝達的表現から区別される非伝達的表現という語用論的区分が、少なくとも日英語に関する限り、文法的に有意義なものだということを示している。このことから、言語の本質的機能を考察する際には、言語の伝達的／非伝達的両側面を考慮する必要があり、二者択一的な考え方では不十分だといえる。

(4) その他の成果および今後の課題

①本研究期間中に、Tateishi (2013)によって、イ落ち構文を語幹への促音付加という一般的現象の１つとみなす分析が提案された。これを受け、イ落ち構文が、促音そのものには還元できない形式的・機能的特性を持つことを示し、構文文法における意味での独立構文であることを示した。

②研究成果の一部は、市販された論文集『言語研究の視座』と日本英語学会の学会誌 *English Linguistics* で発表することができた。このことは研究成果を広く発信するという点で有意義であった。

③機能範疇を欠いた非伝達的表現については、先行研究の知見を援用するのみに留まり、研究期間中に新規現象を発掘することができなかった。機能範疇の欠如と伝達意図の欠如の相関に関する考察を更に深めるために、今後も現象の調査を継続する必要がある。

また、英語の日記文における主語省略、副詞的「やばい」、「からの」における機能範疇の有無については、現時点では文法的なテストを用いた直接的証拠を提示できていないため、議論が不十分である。この点についても、今後も調査を継続する必要がある。

④(3)の研究成果を論文にまとめる過程で、本研究課題から派生する新たな研究テーマを設定することができた。具体的には、本研究で扱った現象が、伝達的表現志向性／非伝達的表現志向性に関して日英語が示す語用論的傾向（廣瀬 1997, 池上 2007, Hirose 2013）に対して重要な意味合いを持つ可能性があることが判明した。研究開始時に予測していた内容ではないものの、この点は大変有

意義であった。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）
〔雑誌論文〕（計５件）
(1) 今野弘章（印刷中）「『からの』の単独用法について」 *KLS* 35, 12pp.（掲載ページ未定）．査読無．
(2) Hiroaki, Konno (to appear) “The grammatical significance of private expression and its implications for the three-tier model of language use,” *English Linguistics* 32:1, 139-155．査読有．
(3) 今野弘章（2015）「副詞的『やばい』の公的表現志向性とその動機付け」，深田智，西田光一，田村敏広（編）『言語研究の視座』, 325-341，開拓社，東京．査読無．
(4) 廣瀬幸生，今野弘章，五十嵐啓太，志澤剛（2014）「公的自己・私的自己中心性と日英語の文法現象：『言語使用の三層モデル』からの視点」，『日本英語学会第 31 回大会研究発表論文集（*JELS* 31)』，267-268．査読無．
(5) 今野弘章（2013）「独立構文としてのイ落ち構文」，『欧米言語文化研究』1，41-57，奈良女子大学．査読無．

〔学会発表〕（計５件）
(1) 今野弘章，「『からの』の単独用法について」（招聘発表），関西言語学会第 39 回大会，2014 年 6 月 15 日，大阪大学．
(2) 今野弘章，「形容詞『やばい』の副詞的成分化－ミスマッチ解消のための用法拡張として－」，第 42 回奈良女子大学英語英米文学会年次大会，2013 年 11 月 30 日，奈良女子大学．
(3) 今野弘章，「イ落ち構文をめぐる二つの視点－全体か部分か－」，日本言語学会第 147 回大会，2013 年 11 月 23 日，神戸市外国語大学．
(4) 今野弘章，「私的表現の文法的意義」，日本英語学会第 31 回大会ワークショップ「公的自己・私的自己中心性と日英語の文法現象：『言語使用の三層モデル』からの視点」，2013 年 11 月 9 日，福岡大学．
(5) 今野弘章，「『やばいうまい』－用法拡張による形と意味のミスマッチ解消－」，ワークショップ「構文と意味の拡がり」，2013 年 10 月 12 日，和光大学．

〔その他〕
ホームページ
https://sites.google.com/site/onnokikaorih/

６．研究組織

(1) 研究代表者
今野　弘章（KONNO, Hiroaki）
奈良女子大学・人文科学系・准教授
研究者番号：８０４３３６３９

(2) 研究分担者
なし

(3) 連携研究者
なし